

◆登場人物

- ◇みなみ……………とても内向的で自分の気持ちを素直に出せない、はずだった。
- ◇麻里子……………みなみの親友。サバサバとしてみなみにお姉さんのように接する。
- ◇悪魔（ユウト）…優しさを持った悪魔。スーツを着た人間にしか見えない。
- ◇コック……………自分の仕事に自信と誇りを持っているコック。
- ◇青年……………作家志望3人組の1人。みなみに好かれている。
- ◇作家1……………作家志望3人組の1人。とても明るく活発な女性。
- ◇作家2……………作家志望3人組の1人。大人しいが言いたいことは言う女性。

◆舞台設定

- ◇舞台は手前の空間、奥の空間の2つを作り、奥の空間は高さを出しておく。
- ◇手前の空間で道を作り、奥の空間で店、部屋を切り替え、両方を使い会場を作る。
- ◇店、部屋の場面では照明を全点灯、道の場面では奥の照明を落とす。
- ◇店、部屋の場面からの暗転は奥のみの部分暗転、道の場面からの暗転は全暗転。
- ◇時間経過を表す暗転はフェードアウト、キープ、フェードイン。

1

冬、喫茶店に青年・作家1・作家2がいる。少しして青年が荷物を持って⑤に帰りだす。入れ違うように麻里子・みなみが来店。コックが④から出てくる。

みなみ『あ…』

青年『あ、すいません。』

みなみ『あの…』

青年が去る。

麻里子『あーもうしょうがないなー。』

みなみ『だって…どうしたらいいかわかんないし。』

麻里子『さっさと好きですって言っちゃえばいいじゃん！』

みなみ『ちよ、声大きいって…』

コック『いらっしやいませ。2名様で？』

麻里子『はい。あれ、店長は…』

コック『急に用事が入ったそうで少し外に出ています、

1時間ほどで戻ると聞いておりますが…お知り合いですか？』

麻里子『いえ、ただの常連です。ねーみなみ。』

コック『これは失礼しました。まだ新人なもので…』

麻里子『そうなんですか。じゃあ注文は店長が戻るまで待ったほうがいいかなー』

コック『いえ、料理は僕が作らせていただきます。』

みなみ『え、』

みなみ、不安そうに麻里子の袖を引っ張る。

コック『腕のほうは店長に認めてもらっていますので、安心してください。』

麻里子『ちよっとみなみ、失礼でしょ。』

みなみ『だって…』

コック『お待ちになりますか？』

麻里子『1時間も待てないよー。あたしお腹空いたー。』

みなみ『じゃあ、あの…お願いします。』

コック『では、ご注文が決まりましたらお呼びください。』（去ろうとするがすぐ呼ばれる）

麻里子『オムライスを2つと、食後にホットコーヒーを2つ。』

コック『かしこまりました。少々お待ち下さい。』

コック、キッチンへ

麻里子『もー、ホントしょうがないなー。』

みなみ『わかってるよ。こういう性格なの。』

麻里子『でもみなみって昔からずっとその調子でしょ？』

怒っているとこゝろなんて1回も見たことないし。』

みなみ『そんなことないよ。私だって言うときはちゃんと言うんだから。』

麻里子『あれ？いつまで経っても好きな男の子に声をかけられないのは誰かなー？』

みなみ『そういうのにはタイミングがあつて…。』

麻里子『相手が悪くても、大声出されるとつい謝っちゃうのはー？』

みなみ『あれはつい、びっくりしちゃつて。』

麻里子『珍しく1人で出かけたと思ったら紙袋いっぱいティッシュ貰つてたり。』

みなみ『だって…。』

麻里子『ドライブ中にトイレ行きたいって言えなくて膀胱炎にな』

みなみ『もういいじゃん私のことは。』

麻里子『たまにはバシツと言ってやればいいじゃん。自分の気持ち！』

みなみ『でも私だって麻里子が怒つてるところ見たことないよ。』

麻里子『私はちゃんとストレス発散してるから。カラオケ行ったり運動したり、

集中できる趣味も大きな夢もあるしさ。

みなみもなにか趣味を見つけたほうがいいと思う。』

みなみ『私このオムライス好きだよ。』

麻里子『そういうのは趣味って言わないの。まあ、確かにここのは美味しいけど。』
みなみ『お店でオムライス頼むと、大体半熟卵で出てくるでしょ？』
麻里子『：いわれてみれば。』
みなみ『私それが苦手なんだよね。』
麻里子『あ、そうなの？知らなかった。確かにここのはちゃんと火が通ってるよね。』
みなみ『小さい頃お父さんに、すごいまいもん食べに行こうって言われて。』
麻里子『お父さんとの思い出の場所でもあるわけだ』
みなみ『うん』
麻里子『そっかーなるほどねー、このオムライスが唯一の癒しかー。』
みなみ『そんなこと一言も言っていないでしょ。でもそうなのかな。：唯一の癒し、か。』
麻里子『もう冗談だって。そんなしみじみ言わないでよ。』

コックが料理を持ってくる。

コック『失礼します。オムライスお2つ、お待たせしました。』
麻里子『わー。美味しそうー。』
みなみ『これ違う：。』
麻里子『え？』
みなみ『これ、違います。』
コック『え？』
みなみ『これ、私の好きなオムライスじゃない。』
麻里子『ちよっとみなみ、：火が通ってないと食べられないって訳じゃないでしょ？』
みなみ『でもこんなの嫌だ！』
麻里子『子供じゃないんだから！』
みなみ『麻里子さっき言ったよね。ここのオムライスが私の唯一の癒しだって。』
言われて初めて気が付いた。こんなのじゃない！』
麻里子『みなみ！』
コック『味のほうには自信がありますが。』
みなみ『そうじゃない！私はあれじゃなきや嫌なの！：帰る。』

みなみ去る。

麻里子『すいません。後でちゃんと叱っておきます。おいくらですか？』
コック『いえ、お代は結構です。勉強不足で申し訳ありませんでした。』
麻里子『そんな、本当にすいませんでした。』

麻里子、退店。

昼間の道。みなみがやってくる。追うように麻里子が走ってくる。

麻里子『みなみ！なにやってんのよ。』

みなみ『…ごめん。』

麻里子『私に謝らないであの人に謝りなよ。』

みなみ『私、あんなこと言うつもりじゃなくて…』

麻里子『もういいから。』

ま、みなみにだつて譲れないことがあるんだつてわかつたしね。はい忘れ物。』

みなみ『ごめん…ありがと。』

麻里子『うん。私さつき会社から呼び出されちゃつてさ、ちよつと行かなきゃいけないんだよね』

みなみ『何かあったの？』

麻里子『お客さんからクレーム。後でメールするから、また明日謝りに行こう。じゃね。』

みなみ『あ…』

麻里子が去る。

みなみ『…クレーム…』

みなみ、手帳を取り出して携帯で電話をする。

みなみ『も、もしもし。先日、そちらの商品を買った者ですが、商品に、傷がついてて…』

はい。いえ、いいんです。…今後は、気をつけて下さい。』

電話を切る。再度手帳を見て電話をする。

みなみ『もしもし。よくそちらを利用する者ですが、なんなんですかあの接客は。』

もつとしっかり教育してくださいよ。…はい…もういいです。』

次からは気をつけてください。』

電話を切る。歩きながら手帳をめくる。トラックのSE。電話をかける。

みなみ『今自宅のトラックに轢かれるところだったんだけど…は？信号？』

人を轢きそうになつた…そんなことで許されると思つてるの？』

喋りながら去る。暗転。

3

次の日の朝の道。

麻里子『遅いなあ。(電話をかけて切る。)話し中か、私にかけてるのかな？
 ……かかってこない。もう。(電話をかける)
 あ、みなみ？誰と話してたの。もう待ち合わせの時間過ぎてるよ。どうしたの？え？
 なにがもういいの？…もうあのお店には行かないって…
 みなみの唯一の癒しはどうするのよ。…え？…それよりいいこと？
 ちよつと、謝りに行こうって言ったでしょ！？
 ……いいから来なさい！待ってるから！(電話を切る)…あーもう。』

みなみがやってくる。

麻里子『あれ、早いじゃん。まだ家にいるのかと思った。』
 みなみ『ちよつと探し物してて。見つけたらすぐ電話しないといけないから。』
 麻里子『なに？大事なもの？』
 みなみ『うん。趣味みたいなもの。行こうか。』
 麻里子『う、うん。』

みなみ去る。後を追って麻里子も去る。

4

喫茶店。作家1、作家2、コックがいる。そこへみなみ、麻里子がやってくる。

コック『いらつしやいませ。昨日は失礼いたしました。』
 みなみ『いいんです。私もごめんなさい。』
 今日はまだ時間が早いので、コーヒーとモーニングだけ頂きます。』
 麻里子『…あ、じゃあ、私もそれで』
 コック『かしこまりました。少々お待ちください。』

コック、キッチンへ。

みなみ『…どうしたの？』
 麻里子『なんかみなみ雰囲気変わった？あれから何かあったの？』
 みなみ『別に？麻里子に言われて、自分の気持ちを素直に出すようにしただけ。』(周りを見る)
 麻里子『ひよつとして例の彼？今日は来てないみたいだね。』
 みなみ『そうだね。』(さらに周りを見回す。)
 麻里子『あ、さっき言ってた探し物？この店に忘れたの？』

みなみ『んー、探し物って言っても私のじゃないの。ほんと趣味みたいなものだよ。』
麻里子『さっきもそう言ってたけどさ、趣味ってそうやって見つけるものじゃないよ。』
みなみ『わかってるよそんなこと。』

コック、コーヒーを持ってくる。帰り支度を始める作家2。

コック『お待たせしました。お先にコーヒーお2つを…』

作家2のバッグがコックにぶつかる。作家2は気付かず去る。

コック『大変失礼いたしました。すぐに淹れなおしますので!』

みなみ『見つけた』

麻里子『え?』

みなみ『ちよつとアナタ、コーヒーを淹れなおす前にやることがあるんじゃない?』

麻里子『みなみ?』

コック『：申し訳ありません。お怪我はありませんでしたか?』

麻里子『いえ、そんな…』

みなみ『私の服にコーヒーが付いた。どうしてくれるの?』

コック『申し訳ございません!すぐにおしぼりを…』

みなみ『昨日からなに?私に嫌がらせでもしたいの?』

コック『いえ!本当に申し訳ございません!』

みなみ『丁寧な言葉を並べれば許されると思ってるんでしよう!』

麻里子、みなみに平手打ち。

麻里子『いい加減にしなよ。』

みなみ『何するの…?友達でしょ?』

麻里子『そんな友達いらない!ちゃんと謝りなさい!』

みなみ、走って去る。

麻里子『みなみ!…どうしちゃったのよ。』

5

帰り道。みなみがやってくる。

みなみ『どうして。趣味を見つけてるって言ったのは麻里子じゃん。…どうしてこうなったの。そうだ、神様、神様はいつも私達を見てるんでしょ?私の人生は欠陥品だよ。どうしてくれるの?』

欠陥品：そうだ、取り替えて。私の人生。取り替えてよ、ねえ：取り替えろおお！』

雷のSE。小暗転。

悪魔『取り替えることはできないが、それに近いことはしてやろう。』

みなみ『：誰：？』

悪魔『私は悪魔。お前の望みを叶えに来た。』

みなみ『悪魔？悪魔がスーツ着てるの？バカじゃないの。』

悪魔『お前は聖書を読んだことがあるか？聖書の中で、神は何人の人間を殺してると思う？』

みなみ『人の話聞いているの？アンタみたいな人と話す気分じゃないんだけど。』

悪魔『ざっと200万人以上だ。』

それに対して悪魔であるサタンが殺した人間の数は：わかるか？』

みなみ『はあ：500万？700万？どうでもいいよそんなこと。』

悪魔『10人だ。』

みなみ『：え？』

悪魔『私達悪魔は人間の死を望んでいない。』

ただ観客として、お前達の演じる人生を見せてほしいだけだ。』

みなみ『なんなの？新しい宗教の勧誘？』

悪魔『長い事生きていると退屈だな。お前達が演劇を観るように、』

私達も人間の生き様を観ているんだ。多少のスパイスを加えてな。』

みなみ『はいはい。その多少のスパイスってやつで、私の人生を取り替えてくれるの？』

どうせ何もできないんですよ。もうどっか行ってよ。』

悪魔『聞いてなかったのか？取り替えることはできないが、それに近いことはしてやる。』

これからお前に、人生を保存し、そこからやり直す権利を与えよう。』

みなみ『アンタしつこいね。わかったよ。付き合ってあげるよ。で？保存とやり直して？』

悪魔『テレビゲームで言うセーブとロードだ。これからお前は好きなときにセーブし、』

最後にセーブした時間からロードすることができる。』

みなみ『残念だけど、テレビゲームやったことないからわかんない。セーブとロードって何？』

悪魔『セーブというのは現在の状態を保存することだ。やり直したい時は時間をさかのぼり、』

最後にセーブした続きからの人生を歩むことになる。そのやり直しがロードだ。』

みなみ『ということは、セーブを2回したら1回目のセーブは消えて、』

2回目の時間の上書きされるわけ？』

悪魔『飲み込みが早いな。同じことを300年程前に説明した時は大変だったぞ。』

みなみ『説明を続けて。』

悪魔『：疑わないのか？』

みなみ『疑って話を聞かないんじゃない、もし本当だった時に困るでしょ。説明を続けて。』

悪魔『そう焦るな。これから何度でも説明してやる。』

私は普通の人間として、お前と一緒に暮らすからな。』

みなみ『観客として、特等席で見物したいってことね。話が本当なら、だけど。』

悪魔『それもあるが、セーブしたい時は私に言え。』

ロードしたい時もそうだ。一緒にいないと困るだろう？』

みなみ『そう。それじゃ不便だね。セーブしたい時はアナタに言う。でもロードしたい時は…
例えば、指を鳴らせばそれがロードの合図。それくらい言わなきゃ。』

悪魔『わかった。セーブの回数は無制限だ。』

さっきも言ったように2回目からは上書きされるがな。

ただし、ロードの回数には制限がある。お前達の言う悪魔の数字、6回だ。』

みなみ『6回…。』

悪魔『お前はその6回の中に、最高の人生を掴め。』

みなみ『わかった。じゃあ今ここでセーブして。』

悪魔『なかなか賢い奴だな。』

今より過去に戻れないのなら、セーブは1秒でも早いほうがいい。』

悪魔、みなみに向けて手をかざす。セーブのSE。

みなみ『悪魔に褒められるなんて、考えたこともなかったけどね。』

みなみ、ハサミを取り出して指先に傷をつける。

みなみ『痛っ…さあもうおしまい。アンタが本当に悪魔ならロードして。』

悪魔『…ふふふはははは！本当に賢い奴だ。お前なら楽しませてくれそうだ！』

悪魔、再びみなみに手をかざす。ロードのSE。

みなみ『ハサミ…傷がない。記憶はある。本物の？』

悪魔『残りあと5回だ。どうだ？ロードした気分は。』

みなみ『信じらんない…。でもわくわくしてる。ねえアナタ、名前は？』

悪魔『私に名前はなし。この姿も人間に合わせただけだからな。』

みなみ『じゃあ私が決めてあげる。』

ユウト：ユウトは私にとって優しい人、優しい人でユウト。』

ユウト『優しいかどうかはわからないが、少なくとも人ではないぞ。』

みなみ『いいの。どこからどう見ても人にしか見えないし。よろしくね、ユウト。』

みなみ、ユウトと握手。

6

1年後のみなみの部屋。みなみとユウトがいる。みなみは手帳を見ている。

みなみ『ねえユウト、アナタがここに来てからもうどれくらいになる？』

ユウト『そうだな、1年と少し。残りのロードはあと5回。』

みなみ『そっか…。そろそろ潮時かな、貯金もなくなってきたし。ねえ、ロードして。』
ユウト『お前はこの1年間何もしていないぞ。』

ただだからだと生活をして、金がなくなったからロードか？』

みなみ『違う。お金を手に入れに行くの。ね、ロードして。』

ユウト『よくわからんが、いいだろう。』

ユウト、みなみに手をかざす。ロードのSE。

冬の道。みなみとユウトがいる。みなみは手帳にメモを書き始める。

みなみ『…寒。上着持ってくればよかった。』

ユウト『ロードしてお前に残るのは記憶だけ。』

例えお前が裸になってからロードしても、セーブした時のその格好になる。』

みなみ『何その例え。見たかったの？私の裸。』

ユウト『どうでもいいが、お前が1年前に着ていた上着ならそこに落ちてるぞ。』

みなみ『照れないでいいのに。そういえば今日は麻里子とケンカしたあの日か…』

結局あれから連絡来なかったな…。』

ユウト『残りのロードはあと4回。友人との関係をやり直すこともできるぞ。』

みなみ『バカじゃないの。』

ケンカしたつきり1年も連絡がないのに、今さらなにを話せて言うの。』

ユウト『お前にとって1年でも、相手にとってはほんの10分前のことだ。』

みなみ『…行くよ。』

ユウト『友人のところに行くなら、私はここで待っていてやろうか。』

みなみ『優しいね。でも付いてきて。行き先は別のところだから。』

ユウト『いいのか？』

みなみ『いいの！ユウトが言ったんじゃない、最高の人生を掴めって！掴むわよ、大金を！』

何のためにこの1年部屋に閉じこもって過ごしたと思ってるの。すべてこの時の為！』

ユウト『どういう意味だ？』

みなみ『競馬、競艇、宝くじ、大きな当たりは全部覚えてきた。』

この手帳があれば私は大金持ち！』

ユウト『そういうことか。』

先に私に言っておいてくれれば、ロード前に書いたものを持ってきてやったのに。』

みなみ『なにそれ。記憶以外の物も持ってこれるんだ。』

じゃあ今度は、今から手に入れる大金を持ってきてもらおうかな。』

ユウト『残念なことに力仕事は苦手だな。』

みなみ『裸見せても？』

ユウト『しつこい。』

みなみ『冗談だって。手に持てる分しか持ってこれないってこと？』

ユウト『そうだ。通帳くらいなら持って来てやるが、ロードしたら偽物扱いだ。』

みなみ『あっそ。ユウトの方こそ先に言ってくればよかったのに。』

『そしたら必死に覚えなくても、もっと多くのチャンスを掴めたのに。』

ユウト『私には金というものの価値がわからんからな。』

みなみ『欲しいものがあってもお金がないと手に入らないこともある。』

でもお金があれば何だって手に入る。』

『誰もが懂れる地位や名声も、友情や愛情だって。だからこそ大切なもの。』

ユウト『そうか。お前がそう思うなら、私はそれを見届けよう。』

みなみ『なにそれ感じ悪い。さ、行くよ。』

みなみ、ユウト去る。

7

1年後の冬の道。作家1がいる。そこへ作家2がやってくる。

作家2『やっほー。』

作家1『お、来たな貧乏小説家。』

作家2『お互い様でしょ。あれからどうなの？筆は進んでる？』

作家1『あんまり。これだ！って思った話の展開が、最近出た小説とかぶっちゃって。』

作家2『あーあるある。』

青年がやってくる。

青年『お前達さ、前にも同じこと言っただけだったか？』

作家1『しょうがないじゃん。本当なんだから。』

青年『怪しいなー。』

作家2『アンタはないの？私も何回かあるけど。』

青年『いや、あることはあるけど、そんなしょっちゅうはないだろ。』

作家1『どうせ私は運のない女ですー。』

作家2『あ、運って言えばさ、いつもの店でよく見かけるあの大人しい子、

ロトナンバーズで相当な金額当たったらしいよ。』

青年『また！？あの子競馬で万馬券当てて、払い戻しで護衛が付いてたぞ。』

作家1『なにそれー。そんなお金あったら私に分けてよー。』

作家2『くれるわけないでしょ。でもお金があれば自費出版できるね。』

青年『自費出版でも、自分の書いた小説が本屋に並ぶと思うと…』

あー、夢のまた夢かー。お前達金持ってないしな。』

作家1『アンタも人のこと言えないでしょ。』

そこへ、みなみ、ユウトがやってくる。

作家2 『あ…。』

みなみ 『話、聞こえちゃった。…出してみる？アナタ達の小説。』

作家1 『…え？ちよつと本気で言ってるんですか？』

みなみ 『本気。お金ならあるから。アナタ達さえよければ。』

作家1 『よいです！そりゃよいですよ！ねえ！』

作家2 『…ケツコンって、夫婦になる結婚ですか？』

みなみ 『そう。そうしたらこれから好きなだけ出版させてあげる。』

作家1 『…どうするの？アナタにとつたら大チャンスだよ。』

みなみ 『すぐに返事を出さなくてもいいの。答えが決まったらここに連絡…』

青年 『お断りします。』

みなみ 『…え？』

青年 『確かに僕には夢がある。アナタならそれをきつとすぐに叶えることができる。』

みなみ 『…え？』

青年 『確かに僕には夢がある。アナタならそれをきつとすぐに叶えることができる。』

ただそれじゃ、僕は面白くない作家になってしまう。

運がいいだけで中身のない人間になってしまう。

…申し訳ないが、僕は今のアナタのようにはなりたくないんです。』

作家2 『ちよつと…言いすぎ…。』

青年 『お金があれば、何をしてでも許されると思ってるんですか？』

昔のアナタならそんなことは言わなかった。

あの頃のアナタは素敵でした。でも今のアナタは最低だ。…行こう。』

青年、作家1、作家2が歩き出す。みなみ、ハサミを出して早足で青年に追いつく。

みなみ 『ねえ。』

青年、ため息を吐き振り返る。みなみ、青年が振り向いた瞬間にわき腹を刺す。

みなみ 『ロードはまだ4回ある。でも、もう簡単にはできないな。』

青年、ゆっくりと視線を落とす。みなみ、ハサミを引き抜く。青年、膝を付き倒れる。

作家1、作家2、悲鳴を上げて走って逃げる。

ユウト 『金があっても、他の物は手に入らなかったな。』

みなみ、ユウトを睨み付ける。

ユウト 『それから8年間、私は退屈な時間を過ごす。』

あの女、みなみが逮捕される前にこんなことを言い残したからだ。

私はこれから刑務所に入ることになる。ロードはあと4回。だがまだロードはしない。今から3年以上経ってから出版された新人の小説でミリオンセラーが出たらそれを買え。そうやって買った本が3冊になったら、その本と持てるだけの金を持ってロードしろ。これがその3冊目。ようやく退屈な時間が終わる。』

ユウト、本をバッグに入れて客席に向かって手をかざす。ロードのSE。

8

冬の昼間の道。みなみとバッグを持ったユウトがいる。

みなみ『ユウト！久しぶりね！』（コンパクトを出して自分の顔を見る）

ユウト『8年振りだな。ロードは残り3回だ。…どうした？』

みなみ『お肌のハリもセーブした時に戻るのね。なんか若返った気分。あ、若返ったのか。』

今なら見せてあげてもいいよ、裸。』

ユウト『相変わらずだな。ほら、言われた物は持ってきた。人間の書く話もなかなか面白いな。』

お前がいけない間、話相手もないから小説を読んでばかりだった。』

みなみ『私も刑務所で大変だったんだから…あれ？小説いっぱいあるじゃん。』

ユウト『ミリオンは3つだけ。』

他は私がまだ読んでいないものだ。ロードしたら読めなくなるからな。』

みなみ『ふーん。最初のミリオンはどれ？』

ユウト『これだ。出版は4年後、それから1年後には映画化も決まった。』

みなみ『へー。じゃあとりあえずこれでいいや。』

ユウト『その本は私のお気に入りだ。その作者の書く小説は、こうなんというか…』

みなみ『興味ない。どうせ全部私の作品になるんだし。』

ユウト『今度は盗作で地位と名声を狙うのか。だが盗まれた作家はどうなる。』

みなみ『知らないよ。売れる実力があるなら、盗まれたって問題ないでしょ。』

さ、部屋に帰ろ。久しぶりにまともなベッドで眠りたいの。』

ユウト『そうか。まあいいだろう。私も小説の続きを読みたい。』

みなみ、ユウト去る。暗転。

9

1年後の冬の道。麻里子がやってくる、青年・作家1・作家2が走ってくる。

作家1『あの、すいません！』

青年『みなみさんのご友人ですよね？』

麻里子『へ？』

作家2『ほら、そこのお店でよく、みなみさんと一緒にいた方ですよね？』

麻里子『はあ。』

作家1 『やっぱりそうだ！私たち、みなみさんの大ファンなんです！』
麻里子 『ファン？』
作家2 『ええ！まさかあの人こんな人だ！すごい人だ！なんて知らなくて！』
麻里子 『すごい人？あ、ひよっとしてみなみが何か迷惑でもかけましたか？』
青年 『何を言ってるんですか！友達の作品を読んでないんですか？ほら！これ！この写真！』
麻里子 『…みなみ？これ、みなみが書いた小説？』
作家1 『知らなかったんですか？』
麻里子 『全然。あの子そんなこと少しも言っていなかったのに…。』

作家2 『今までなんの賞にも投稿していなかった無名の新人が、
ミリオンセラーまであと1歩のところまで来てるんです！』

青年 『映画化の話も出てるし、今度は新作を2つ同時に発表するって噂もあります！』

作家1 『これってすごいことなんですよ！私たちも憧れのみなみさんみたいになりたい。』

作家2 『だからお願いです！みなみさんと会わせてくれませんか？』

青年 『僕は前から声をかけようとしてたんですが…』

みなみさん最近はこの店にも顔を出さなくなっただし。』

麻里子 『えっと…でも…』

作家1 『友人のアタタから頼まれたら、いって言うてくれると思うんです。お願いします！』

作家2 『お願いします！』

青年 『お願いします！』

麻里子 『じゃあその…連絡してみます。』

作家達 『ありがとうございます！』

作家1 『返事がもらえたらここに連絡してください！よろしくお願いします！』

作家1、名刺を麻里子に渡し、それぞれ頭を下げて陽気に去っていく。

麻里子 『みなみが小説。ミリオンセラーに映画化って…。どんな話なのかな。』

麻里子、小走りで行く。

10

みなみの部屋。みなみとユウトがいる。みなみはパソコンで本を写している。

ユウト 『おい、読み終わった。次の本をくれ。』

みなみ 『何度も言ってるでしょ、読んだならちゃんと燃やして。』

作者の名前が私になってないものが見つかったら面倒だからね。』

ユウト 『わかってるさ。』

ユウト、ジッポを取り出して本を燃やそうとするが、やめる。

ユウト『おい、パーティーを開かないか。』

みなみ『：は？』

ユウト『映画化決定の記念パーティーだ。』

お前に言われたように読み終わった本を燃やしてきたが、原作者達が可哀想に思えてきてな。

お前の邪魔をする気はないが、せめてもてなしてやりたい。』

みなみ『悪魔のくせに、変なところで優しいよね。でもユウトらしいわ。』

場所や招待客なんかの手配は全部任せるから。好きにして。』

ユウト『：やけに聞き訳がいいな。』

みなみ『ユウトから頼みごとされるのって初めてだから。』

それに、原作者がこれを未来の自分の作品だとも知らないで、

どんな評価をしているのか気になるし。』

ユウト『そういうことか。』

みなみの携帯が鳴る。画面を見るが電話に出ない。

ユウト『また麻里子か？』

みなみ『うん。』

ユウト『また出ないのか？』

みなみ『うん。』

ユウト『お前からしたらもう10年以上になるが、麻里子にとってはまだ数ヶ月なんだぞ。』

みなみ『わかってる。でも、どうしたらいいか分かんない。』

ユウト『：パーティーの手配をしてくいていいか？』

みなみ『うん。』

ユウト去る。みなみ、携帯を見つめている。暗転。

二

パーティー会場。大勢のざわざわとした声。青年、作家1、作家2がいる。

それぞれワイングラスを持って談笑。そこへユウトがやってくる。

ユウト『初めましてかな。映画化記念パーティーへようこそ。』

作家2『あ、みなみさんの関係者の方ですか？ご招待ありがとうございます。』

作家1『やっぱり麻里子さんに頼んで正解だったね。早くみなみさん来ないかなー。』

ユウト『キミ達を招待したのは私だよ。1度話をしてみたかったんだ。キミ達の小説について。』

青年『え、本当ですか！でも麻里子さんからじゃないなら、どうやって僕達の作品を…。』

ユウト『原稿を持って出版社を回っているだろう？優秀な作家の話は耳に入るんだよ。』

キミ達はきつとうまくいく。諦めずに書き続けて欲しい。

少なくとも私は、キミ達のファンだ。』

作家達『ありがとうございます！』

作家2『あのー：失礼ですがみなみさんの担当編集者の方ですか？』

ユウト『いや、一緒に住んでいるだけだよ。』

青年『一緒に！？つまり、みなみさんの…。』

ユウト『いやいや、訳があつて同じ部屋に住んでいるだけさ。』

恋人だとか、そういう間柄じゃない。』

青年『なんだ。そうですか。』

ユウト『安心したかい？』

青年『な、何を言ってるんですか。』

そこへコックがやってくる。

コック『あのー…。』

ユウト『どうした？』

コック『料理はほとんど出し終わりました。でも本当に私でよかったですよ。』

ユウト『私がキミを選んだんだ。キミは自信を持ってくれればいい。』

コック『いえ、そういうことではなく。』

みなみさんが私の顔を見たら、また機嫌を悪くされるのでは…。』

ユウト『大丈夫、あの女は物忘れがひどいからな。』

1年前のことでも、まるで10年前のことのように忘れてるさ。』

コック『はあ…。』

ユウト、コックにグラスを渡して乾杯する。ユウトは飲むがコックは飲まない。

作家1『あ！みなみさん！』

離れた場所にみなみがやってくる。

みなみ『皆様。本日はお忙しい中、わたくしの映画化記念パーティーへ足を運んでいただき、

本当にありがとうございます。来月には新作を発表する予定ですので、

応援よろしく願います。それではみなさま、心ゆくまでお楽しみください。』

ユウト『そのドレス、なかなか似合うじゃないか。』

みなみ『ありがと。あの貧乏作家達も呼んだのね。』

ユウト『私がつけてきたミリオンセラーの原作者だからな。』

みなみ『え？あの人達が？』

ユウト『2作目はあの女、3作目はあの女だ。本に写真が載っていたからすぐにわかった。』

みなみ『あの子達が…へー。』

ユウト『すでにお前の名前で出版された本の作者は、顔も性別も不明だ。』

ペンネーム宛にどうか招待状は送ったが、来ているかどうかもわからん。』

みなみ『あの一緒にいる人だったりして……。だって招待状は原作者宛てに送ったんでしょ？』

ユウト『いや、あの男はお前のために呼んだ。あの時は駄目だったが、』

地位と名声を手に入れたお前に、愛情を手に入れるチャンスをやろうと思ってな。それと：』

麻里子がワイングラスを2つ持ってやってくる。

麻里子『みなみ。』

みなみ『麻里子！』

麻里子『久しぶり、小説読んだよ。すごい人気だね。ほら、乾杯しよ。』

麻里子、グラスを1つみなみに渡して乾杯。2人とも少し飲む。

麻里子『作者にみなみの名前が書いてあってびっくりしてさ、』

まさかと思つて何度も連絡してたんだよ？

ずっと：何度も何度も。』

みなみ『麻里子：ごめん。来てくれてありがとね。』

麻里子『ううん。もういいの。こっちこそ、招待してくれてありがと。』

招待状が来たときに、もうこれがみなみと話す最後のチャンスだと思つて。』

みなみ『そんな暗い顔しないでよ。せつかく来てくれたのに。』

麻里子『だってもう、みなみは違う世界の住人になっちゃうから。』

さつきまでちゃんとわかつてたはずなのに。』

もう会えなくなる覚悟をしてたはずなのに、こうやって顔を見てるとき。』

みなみ『麻里子：。』

青年『あのー、みなみさん。作品読ませて頂きました。僕のこと覚えてますか？』

みなみ『え：？あ、ありがとうございます。あの、えつと。』

青年『あ、気にしないで下さい。覚えてなくても当然です。何度か同じ店にいただけですので…』

ですが、僕はアナタと会うためにあの店に通っていたようなものです。』

みなみ『え：？あ、あの！私！』

青年、みなみの言葉を手で制す。

青年『アナタのことを愛しています。僕と、結婚してくれませんか？』

コック『ちよつと待ってください！みなみさん、僕のことを覚えてらっしゃいますか？』

その方の言うお店で働いていた、ほら、半熟オムライスの！』

みなみ『あ…。』

コック『私はあれから必死に頑張りました。いつかアナタを見返すために。』

でもアナタはお店に来なくなっちゃった。このパーティーのコックを依頼された時も、こんな私でいいのかと迷いましたが、またアナタに会いたい一心で引き受けました。アナタをその男に譲りたくない。アナタのことを愛しています。どうか、私と結婚して頂けませんか？』

みなみ『…え？え？…あの…。』

作家1『そうだ！こういうのどうですか？』

2人共目をつぶって跪く、自分の持っているワインを差し出して、
みなみさんは好きなほうのワインを受け取って飲む。』

作家2『いいねー！そういうの！小説みたい！』

コック・青年。顔を見合わせてから跪く。

青年『僕と！』

コック『いや、私と！』

青年達『結婚してください！』

みなみ『…ユウト。みんなを呼んでくれてありがとうとね。』

私は地位も名声も友情も愛情も手に入れた。

最高の人生だよ。…ねえ、セーブして。この最高の時をいつまでも忘れないように。』
ユウト『…いいだろう。』

ユウト、みなみに向けて手をかざす。セーブのSE。

みなみ、ユウトに微笑んでから青年のグラスを取り、飲む。』

みなみ『ちゃんと覚えてるよ。』

だって私、勇気がなくて言えなかったけど、…ずっとアナタのことが好きでした。』

祝福の歓声。青年は立ち上がりコックはうなだれる。数秒後に心臓の鼓動SE。

みなみ、胸を押さえグラスと青年を交互に見つめる。

何かを言いたそうに口を動かすが声が出ない。

指を鳴らす。ユウト、みなみに向けて手をかざす。ロードのSE。

みなみ『なんのつもり！？私がアナタを刺したことを恨んでるの！？』

青年『…なんのことですか？』

みなみ『とぼけないで！シラを切るつもりならそのワインを飲み干しなさい！』

青年、ワインを飲み干す。

みなみ、飲み干したのを見届けてからコックのワインを取って飲む。

みなみ『私は彼と結婚するわ。アナタとは違って誠実な彼とね。』

少し間が空いて祝福の歓声。数秒後に心臓の鼓動SE。
みなみ、胸を押さえコックを突き飛ばす。

みなみ『どうということ…まさかアナタも毒を…』

みなみ、少しの間苦しみに耐えようとするがすぐに限界が来て指を鳴らす。
ユウト、みなみに向け手をかざす。ロードのSE。

みなみ『2人共なんで。……どうしてアナタは平気だったの？毒入りワインを飲んだはずなのに。
まさかセーブの前に。誰か助けて。ユウト、麻里子。』

麻里子『みなみ。』

みなみ『麻里子：私取り返しのつかないことしちゃった。

みんなの作品を盗んで、自分の物にした。』

麻里子『知ってるよ。』

みなみ『え…？なんで…。』

麻里子『映画化決定おめでとう、なんて思っただけよ。

だってこれ、私が大学時代に書いてみなみに見せたものだから。

あの時みなみにつまらない顔されてさ、少しずつ直してたんだよ。

出版社に持っていくためにね。』

心臓の鼓動SE。みなみ、胸を押さえる。

みなみ『そんな…じゃあ麻里子の言ってた大きな夢って…。』

みなみ、苦しみに耐えられず指を鳴らす。

ユウト、みなみに向けて手をかざす。ロードのSE。

みなみ『麻里子、ごめん！麻里子の作品を盗んだ。大切な夢を奪った。

でも…でも私、まだ死にたくない！』

麻里子『…なんでわかったの？』

みなみ『麻里子！』

麻里子『味も匂いもしないはずなのに…効き始める前に気付くなんて…。』

みなみ『…どうして？仲直りしに来たんじゃないの？』

麻里子『そんなこと言っていないよ？昔みなみに見せた私の作品が、みなみの名前で出版されたから、

まさかと思っただけ連絡したの。何度も何度も。私に盗作がバレて避けてるんだと思った。』

みなみ『そんな…。』

麻里子『だから招待状が来た時はびっくりしたんだよ。

もうこれがみなみと話す最後のチャンスだってさ。』

みなみ『麻里子、お願い。麻里子の気が済むまで謝るから、解毒剤を出して。』

麻里子『無理だよ。だってもう、みなみは違う世界の住人になるって覚悟してきたんだもん。解毒剤なんて用意してない。』

みなみ『麻里子…。』

心臓の鼓動S E。みなみ、胸を押さえてユウトを見る。

みなみ『ユウト：お願い。アナタと出会った日にロードして。』

ユウト『2回目からのセーブは上書きされると言ったはずだ。』

それにもう、6回のロードは終わった。』

みなみ『ひよっとしてアナタ：最初から、こうなるって知ってたの…？』

みなみ、息絶える。

ユウト『すまない。麻里子を呼んだつもりはなかったんだ。』

麻里子『みなみと一緒にいたんだね。』

ユウト『どうせまだ呼ばれないと思ってな。』

麻里子『前は50歳の時だったもんね。』

ユウト『あの小説、本当に麻里子を書いたのか？』

麻里子『まさか、私が60歳になる頃のベストセラーだよ。』

時間かけて現代風にしたのになー。』

ユウト『やっぱりな。今回はもう終わりか？』

麻里子『そうだね。そこそこ楽しめたし、今日は記念日だしね。』

ユウト『記念日？』

麻里子『そっか。アナタはみなみといたから、ちよっと違うのかな。さ、行こっか。』

ユウト『待て、何の日だ？』

麻里子『もう…。アナタと出会って300年。（指を鳴らす。）』

暗転。カーテンコールM E。キャスト整列。明転。挨拶。幕。